

久野康成の

「私なら、こうする！」

非常識な実践経営アドバイス



第18回「ワークライフバランスを導入する方法は？」

[プロフィール]
久野康成(くの・やすなり)
公認会計士。人財開発・東京コンサルティングファーム会長兼CEO。明誠監査法人パートナー。東京税理士法人統括代表社員。1965年生まれ。愛知県出身。滋賀大学経済学部を卒業後、青山監査法人(ブライスクウォーターハウス)入所。監査部門・中堅企業経営支援部門にて、主に株式公開コンサルティング業に携わる。98年久野康成公認会計士事務所を設立。東京のほか、横浜、名古屋、大阪、福岡、香港、インドにて「第2の会計事務所」として会社を設立。経理部門へのスタッフ派遣・紹介など幅広い業務を展開し、グループ社員総数は430人に上る。著書に『できる若者は3年で辞める!』『2008年版 図解インドの投資・会計・税務の基本』(共に出版文化社)がある。

Question

景気の悪化に対応し、新卒・中途採用を抑えたのですが、それが影響し1人あたりの業務量が非常に増えています。社員の残業量も増え、帰宅できる時間が遅くなっています。長時間労働によって、心身の健康に害を及ぼす可能性もあります。仕事と家庭を両立させる「ワークライフバランス」という考え方が昨今、注目されておりますが、どのように導入していくべきでしょうか?社員数を増やせない状況で、改善策はあるのでしょうか?

(東京都 取締役人事部長 47歳)

Answer

生産性を上げるためにも必要な多様な働き方とは

ワークライフバランスとは、仕事と家庭を調和させ、みんなが働きがいや充実感を持ちながら仕事の責任を果たし、家庭や地域社会で多様な生き方の選択をしていくことです。

この流れを受けて、パナソニックでは、会社に出社しない「在宅勤務」の導入をしています。工

場労働者や在宅勤務のできない人を除き、ほぼ全員が対象であることが特徴です。この結果、7割の人が仕事の効率性が上がったと言っています。会社にとっても、優秀な社員を引き付けるには、このような働き方の多様性を社員に示すことが重要ということでしょうか。

ワークライフバランスを考えるにあたり、「なぜ、働くのか?」という意味を真剣に考えてみる

必要があります。家族を養うために働く人にとって、確かに、仕事と家庭はバランスを取るべき対象かもしれません。充実した生き方とは、人それぞれ異なります。従って、さまざまな働き方を経営者として提示していくことも重要かもしれません。

しかし、経営者にとって、社員にどんな働き方をしてほしいのかもまた存在するはずで、私が11年前に独立したとき、ある税理士と名刺交換をしました。その名刺を見てびっくりしたのは、名刺に「24時間営業」と書いて、大きく本人の携帯番号が印刷されていたのです。詳しく聞くと、40歳を過ぎてから、周りの反対を押し切り、半年ほど前に独立されたばかりとのことでした。しかも、社員はまだ誰もいない状態だそうです。

「24時間営業と書いたら、夜中に電話が来て寝られなくなるのではないですか？」と聞くと、「もし、夜中に顧客から電話があればちゃんと対応します。」と言わ

れました。とても私には真似できないと思いましたが、よく考えれば、夜中に電話する無茶な人は、それほど多くはないはずです。しかし、彼の仕事に取り組む姿勢に感動する人は大勢いるはずで、私もその姿勢に大きく感動した1人です。その後、仕事でも何度かお付き合いさせていただきました。

あれから11年。今では、社員が10人を超える大きな会計事務所になり、順調に成長し続けています。働き方は多様かもしれませんが、顧客が感動する働き方は、限られているのかもしれない。

顧客中心の仕事をして、使命感を持つことが大事

また、これと全く反対の経験をしたこともあります。10年以上前の話です。当時、私は自宅を建てようと思っていました(いまだに実現はしていませんが……)。大手住宅会社の営業担当者、1級建築士に完成予想図

を描かせて欲しいといわれ、非常に好感のもてる営業担当者だったので、私も是非と思いい、私が理想とする家を建築士に語りました。

そして出来上がった完成予想図を見て、愕然としました。確かに私の希望は盛り込まれていましたが、何の感動もしませんでした。そればかりか、庭には節税対策にとアパートが建っているのです。私が会計士だから完成図に節税対策を盛り込むべきと思ったのでしょうか。私の「言葉」は、概ね反映されていましたが、「意図」は全く反映されていませんでした。世の中には、「建築士」と「建築家」と呼ばれる人がいます。資格は同じでも、生き方が異なるのではないのでしょうか。

人にはさまざまな考え方があり、務を提供する先には必ず顧客が存在するのです。その顧客を中心に仕事を組み立てられる人、そこに使命感を持って働ける人

が、結果として真に充実した人生をおくることができるようになるのではないのでしょうか。

仕事と家庭をバランスさせようと思っている時点で、問題なのです。今後、ますます情報社会の中で知識労働を提供していかなくてはなりません。これは、肉体労働と異なり、われわれ自身がクリエーターやアーチストの領域の仕事をしなくてはならないことを意味します。

「在宅勤務」なども、この領域に達した人でなければ、逆に仕事の効率が悪くなるかもしれません。形式だけ真似ても、魂がなければ、画竜点睛を欠くことになりかねません。この領域に達する人は、仕事とプライベートをそもそも区分する必要はないのです。仕事こそ「最高の道楽」であり、365日有給休暇だからです。

(このコーナーでは、経営に関するよろず相談を読者の皆様から受け付け、実践的アドバイスとしてお答えしております)